院内がん登録のデータ活用の一例

奥村 英里　　纐纈 五月　　井手 由紀
岐阜大学医学部附属病院　がんセンター

１．はじめに

当院は院内がん登録を開始し 10 年が経過した。この蓄積した膨大なデータはこれまで、一般的な棒グラフ等を用いて様々な集計を行ってきた。

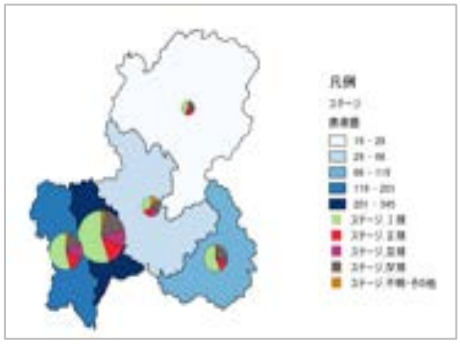
岐阜県は県境を他県に囲まれた地域柄でもあり、以前より患者が流出入することは感覚としてあったが，視覚的な資料を用いて提示することはできない課題があった。そこで今回は、登録情報の郵便番号を用いて地図上に患者住所を表示する手法を学び、視覚的効果のある資料を作成したので報告する。

２．方法

岐阜大学工学部の教員を講師として招へいし、無料で提供されているフリーのオープンソース地理情報システム「QGIS」を用いた地図作製の講義を、県内のがん診療連携拠点病院のがん登録者を対象に、2 年間で 3 度開催した。なお基データには、当院の 2011 年から 2015 年院内がん登録データの郵便番号を用いて実施した。

３．結果

①岐阜県を中心に隣接県を色分けし、高速道路と鉄道情報を追加したことで視覚的に理解しやすい地図を作成することができた。②当院の所在地である岐阜市と近隣市町からの受診が全体の多くを占めていることが明らかに証明できた。一方で飛騨医療圏などの遠方からの受診も多くあることを表現することができた。③隣接している愛知県へ流出する患者も多いものの当院への受診もあることが視覚的に把握することができた。

４．考察

今回は、あくまでも当院のみのデータ結果であり、県全体の状況を示すものではないため、県全体のデータから「QGIS」を用いて，患者の動向や部位別の集計等に活用していく必要がある。今後も引き続き、患者さん等が視覚的に理解しやすい資料を作成していきたいと考えている。